

町史

とっておきの話

296

国立科学博物館
分子生物多様性研究資料センター

よしかわ なつひこ
吉川 夏彦

カエルとサンショウウオの楽園・ただみ⑤

只見町のカエル②

只見町のカエル類で馴染みがある種類はやはりニホンアマガエルやトノサマガエルなど、水田や人家の周辺で見かけることが多い種類ですが、町内には他にもさまざまなカエルの仲間が生息しています。

アズマヒキガエルは町内では「ますびつき」とも呼ばれますが、マガエルという呼び名でもよく知られた比較的大型のカエルです。四



▲5月の雪解け後の水たまりに産卵のため集まり「カエル合戦」をするアズマヒキガエル(布沢)



▲沢沿いの林床でよく見つかるタゴガエル(入叶津)

月から五月の繁殖期には人家の池や山中の湿地などにたくさんの個体が集合して産卵する「カエル合戦」が見られ、特徴的な長いひも状の卵塊を産みます。かつてはよく見られたカエル合戦ですが、近年はそのような光景が見られる場所は少なくなってきたようです。本種は天敵に出会うと「ガマの油」としても知られる毒成分を

含んだ白い粘液を皮膚から分泌します。この粘液はとくに耳の後ろにある耳腺じみせんという膨らみから多く分泌され、この部分を敵に向けるためにとる防御姿勢はまるで土下座をしているようにも見えます。この毒のおかげでヒキガエルの天敵は多くありませんが、町内にも生息するヤマカガシというへビはヒキガエルを捕食する天敵として知られています。

アカガエルの仲間は明るい赤茶色の体色のカエルの仲間で、背中の左右に背側線はいくせんと呼ばれる二本の線があり、その体色から只見では「あかびつき」と呼ばれます。町内にはヤマアカガエルとタゴガエルの二種類のアカガエルの仲間が生息しています。ヤマアカガエルは少し山寄りの場所に多くみられ、四月から五月ころ、田起こし前の水田の浅い水たまりや山の池、湿地などに千個以上の黒い卵が入った丸くて大きな

ゼリー状の卵塊を産みます。本種は短期間に二斉に多くの個体が集まって産卵する爆発的繁殖という繁殖戦略をとりますが、産卵は夜間に行われるためその様子を見ることは多くありません。町内では雪解けの状況に応じて産卵時期に幅があり、蒲生地区などの多雪地や標高の高い山奥の湿地では六月になつてもまだ産卵がみられる場所もあります。

ヤマアカガエルと間違われやすいのが、それよりもやや小型のタゴガエルです。山地性が強く、登山道や沢沿いを歩いているとよく出会うカエルで、人里の近くではあまり見かけません。本種は山中の湧水の石の下で産卵します。繁殖時の鳴き声はまるで犬のようで、五月から六月ころには石の下からウォンウォンウォンという鳴声がかかんに聞こえます。卵は大粒で数が少なく、二つの卵塊で七〇個程度です。その代わりに卵黄分が多く含まれており、オタマジャクシはその栄養を使うことで餌を食べずに子ガエルまで成長することができず、敵に見つかりにくい石の下に産卵し、成長するまで外に出てこない変わっ

た戦略で、タゴガエルは町内の山地環境でとても繁殖したカエルになっています。

カジカガエルは溪流とその周辺の森に生息するアオガエルの仲間です。アオガエルの仲間とはいえず、体色は周辺環境に溶け込む灰色や茶色をしており、緑色が鮮やかなモリアオガエルなどに比べると地味な見た目をしています。しかし本種の鳴き声は非常に風流で美しく、五月から七月ころに只見川や伊南川をはじめとする町内の河川でさかんに鳴いている声が聞こえます。本種の鳴き声は古くから和歌にも詠まれ、飼育して鳴き声を楽しむための河鹿籠と呼ばれる籠が作られたりした時代もありますが、町内では夏になれば飼育しなくても、夜に川辺を歩くだけで本種の鳴き声を楽しむことができます。カエル類は個体数も多く鳴き声もよく聞こえるため、音も含めた町内の景観を形作っている重要な要素の一つだと考えられます。今後も季節になるとさまざまなカエルの声聞こえる豊かな自然環境を守っていききたいものです。